敵はどこにいるのか

今年三月に九十一歳で亡くなった舞台美術家の朝倉摂さんが生前こんなことを話していた。

「今、不幸なのは敵が見えないことですね。昔は封建的なことやファシズムなど、対立するものがいっぱい自分の前に立ちはだかっていた。今は、外形がぐにゃぐにゃしているでしょ」

朝倉さんは、彫刻家朝倉文夫の長女（ご本人はそう紹介されることを嫌がったそうだが…）。蜷川幸雄や唐十郎、野田秀樹、三代目市川猿之助（現猿翁）らの作品など、数々の舞台美術を手がけた。父に反発しつつも、同じ美術の世界で自らの境地を切り開いた朝倉さんらしい言葉だ。

朝倉さんがNHKの番組でこの発言をしていたのはずっと以前のことだが、何だが今の時代状況も似た感じがする。敵の姿は見えない。けれど、周囲には不安感が満ちている。

少し前までは、敵を設定する政治手法がもてはやされた。小泉純一郎元首相は、自らの改革に従わない政治家や省庁を「抵抗勢力」と決めつけ、対立をあおることで求心力を高めた。

鳴り物入りで進めた「構造改革特区」は、成功事例は少なかったが、官僚がいかに地方の求める規制緩和に抵抗するかの姿をあぶり出し、結果的にそこへ切り込もうとする小泉氏の人気を支えた。一時的にブームとなった橋下徹大阪市長も同じ手法だった。

しかし、「脱官僚支配」を掲げ、霞が関をうまく使いこなせなかったことが挫折の要因となった民主党政権の後は、役人と「うまくやる」ことの方が評価されるようになった。中央対地方の対立構図も消え、政府にもの言う首長はいなくなった。今は逆に、嫌われないように、嫌われないように、顔色をうかがうようなムードが広がっている。

安倍政権が突然「地方創生」を掲げ、人口減少に歯止めをかけると言い出したのも気になる。来春の統一地方選対策らしいが、増田寛也元総務相の日本創成会議分科会が「消滅自治体リスト」を公表して危機感をあおった動きも、裏では連動しているのだろう。

地方は、国から改めて言われるまでもなく、もともと人口減少への危機感が高い。「地方創生」に異論があるはずもなく、何とか利用してやろうという機運は高まるだろう。人口減少は統一地方選の最大の争点と言われるに違いないが、対立軸は見いだしにくい。安倍政権の争点をあいまい化する戦術は、成功するのではないか。

政治的な対立軸が見えにくいのは、野党の極端な弱体化も大きい。安倍政権が集団的自衛権の行使容認や特定秘密保護法、原発再稼働など、国民の反発を生む政策をごり押ししても、国会での議論は拮抗しない。問題は明確なのだが、すべてがうやむやになっていく。「敵」をとらえようとしても、相まみえるのが容易ではない。

ただ一方で、人間にとって何らかの戦う相手は常に必要なのか、とも思ってしまう。霧がかかったような政治の世界とは別に、ちまたでは、思いやりも知性もなく、攻撃性の強い過激な論調がより強まっている。週刊誌などの見出しに踊る「嫌韓憎中」などのキャンペーンは典型だ。極端なヘイトスピーチまでいかなくても、似たようなニュアンスで愛国心や国家主義を唱える人たちは身近にも増えている。

誤報問題に端を発した「朝日新聞たたき」も同じ流れの中にある。普段は偉そうなエリート集団を懲らしめて溜飲を下げる気分もあるのだろう。誤報を免罪するつもりは毛頭ないが、「反日」や「売国」などの批判が続くと、とてもついていけない。

本来理性的であらねばならない新聞同士が、たたき合う構図も見ていてつらい。言論機関が、自らの口封じにつながるような空気を作り出すのは、戦前の日本がたどった二度と歩んではいけない道だったはずだ。

敵を間違えてはいけない。いらだちやため息を飲み込んだ黒い塊は確実に広がっている。よく目を懲らせば、朝倉さんが言っていたような敵は、すぐそこまで来ているかもしれない。気付かぬうちに、自らをも浸食していそうで怖い。

＜由＞